

新島伝の謎「授洗者は誰か」を解く

本 井 康 博

今回の発表は、既発表の拙稿をベースにしたので、以下、それを転載する。『同志社時報』141号（2016年4月）中の「特別寄稿」で、原題は「新島襄の恩師たち（留学編）－新島伝の謎「授洗者は誰か」を解く」である。

高校時代

新島襄は在米8年間の留学中、三つの学校に通った。その間、勉学と求道の両面で、何人もの「恩師」に恵まれた。ただ、洗礼を受けた牧師だけは、いまだに^{ミステリー}闇の中である。

アンドーヴァーのフィリップス・アカデミー（1865年～67年在籍）での恩師と言えば、校長のS・H・テイラーであろう。新島のいわば「養父」（A・ハーディ）が学園理事長であったうえに、校長はE・A・パーク教授（後述）とも昵懇の仲であったので、新島に対して気配りを忘れない。

教員以外では、新島と同じヒデユン家に下宿していたE・F・フrint・ジュニア夫妻の影響が、圧倒的である。フrintは現役の神学生（院生）だけに、妻と共に新島に聖書を講じた。新島が受けた聖書に関する初めての本格的な手ほどきであった。

高校時代の新島のサイン帳に、フrintは愛唱聖句「ヨハネ 3・16」（「神はそのひとり子を賜ったほどに……」）を付す。新島に最初に教えた聖句でもある。新島はこれをカードに日本語で記して、日曜学校教師にも贈る。また、この句を「聖書の中の太陽」、「福音の要」と絶賛して、終生、もっとも愛好した。これもフrint直伝であったことが、判明する。ちなみに、フrintと新島の死後、フrint夫人が同志社に贈った献金で「フリン

ト記念文庫」が同志社図書館に備えられた。

このほか、新島はヒデュン家が通うオールド・サウス教会の日曜学校で、P・F・マッキーン（女学校副校長）とも知り合った。が、詳細は不明である。

むしろ、教会役員（Deacon）のE・テイラーとの交流が、密であった。彼は日曜学校校長を長年務めたうえ、1868年からはフィリップスとアンドーヴァー神学校（両校は同じキャンパス）双方の会計となった。独身の彼は、週に一度はヒデュン家から食事に招かれたので、新島には家族のような存在であった。

紛らわしいが、同教会には、いまひとり、テイラー（J・L・テイラー）という有力会員もいた。これまで注目されてこなかったが、新島とは意外な繋がりがあるので、後述する。

大学時代

アーモスト大学では、看板教授のJ・H・シーリー（後に学長）の指導が群を抜く。この点は広く知られているので、多言は要しない。

彼以外では、近接するマサチューセッツ農科大学のW・S・クラーク学長との師弟関係が、目につく。ごく短期とはいえ、アーモスト大学で新島に化学を教えた。札幌農学校で「札幌バンド」を指導する以前のことで、新島を「私の最初の日本人学生」と断定する。クラークは札幌から帰国の際、わざわざ同志社や「新島旧邸」を訪ね、新島夫妻にも会った。

他大学の教員となると、イエール大学のN・ポーター学長である。彼の著作3冊が、今も新島旧蔵書として残る。同じ教派（会衆派）とは言え、大学を越えた奇しき「師弟関係」である。おそらくイエール好きのテイラー校長の仲介であろう。

大学院時代

問題は、大学院（アンドーヴァー神学校）である。教授数名の中から恩師

をあえて選ぶと、先述の J・L・テイラーと E・A・パークであろうか。

まず、前者であるが、経歴からしても、新島の高校時代から交流が始まっても、おかしくない。イェール（大学と神学校）を出て、アンドーヴァーの会衆派教会（オールド・サウス教会）の牧師を 1852 年まで務めた。新島が、ヒデユン家と共にこの教会で世話になった頃、テイラーは、フィリップスと神学校双方の会計（つまり、E・テイラーの前任者）兼理事を務めていたので、新島はさぞかし種々の宗教的指導を受けたはずである。

J・L・テイラーは新島が大学に入学すると、神学校の教授（旧約学・牧会神学）、学長に就任するので、新島が院生としてアンドーヴァーに戻るのを心から歓迎したであろう。帰国する新島が、ボストンで按手札（牧師任職）を受けた際、アンドーヴァー神学校を代表して参列したのが、この学長である。

ただ、両者間の手紙は、残っていない。新島は、ハーディやヒデユンへの手紙の中で、テイラー学長への伝言を時に依頼する程度である。

J・エドワーズの申し子

それに対して、同じ教授、牧師でもパークとの交流は断然、密である。新島に洗礼を受けた牧師である可能性が、もっとも高い。

パークは、アンドーヴァー神学校の看板教授（組織神学）で、いわゆる「ニューイングランド神学」を護る「最後の古参番兵」であった。この神学は、ジョナサン・エドワーズに始まり、パークで終わる。「J・エドワーズの申し子」であるパークは、ミドルネームが奇しくもエドワーズであるうえに、パーク夫人は、エドワーズ直系（4代目）である。死期を迎えるまで、パークが手がけていたのは、エドワーズの伝記であった。

エドワーズと言えば、アメリカのキリスト教史上、もっとも著名な牧師、神学者のひとりである。会衆派の信徒・牧師の「世界」ランキング（1904年）で、堂々の一位を獲得したことがある。ちなみに、この時パークは8位に、そして新島も26位に食い込んでいる。パークの教授在職は45年間（1836年～81年）にも及び、新島の在学期間（1870年～74年）をもカバー

する。

リベラル派からの批判

新島は、パークを畏敬しながらも、時に恩師の神学を批判する。「アメリカノ如キ国ニ於テスラ、立派ナル窮^{きゆう}理^り学者^が、孔子ノ如キ説ヲ唱^{ひと}ヘテ、一〔タ〕ヒ罪ヲ犯セシ上ハ、必ス神ヨリ罰ヲ受ケザルヲ不得、又、犯シタル罪ナラハ、其罰ヲ受ベキガ当然ナリト申セシ事モアリ」と（〔 〕は本井）。

新島によれば、パークが説く「孔子ノ如キ説」は、キリスト教と相容れない。「我儕説ク所ノ耶蘇ノ妙教ヲ知ラザル者ハ、唯々、孔子ノ云レシ所ノ事ヲノミ取り、一〔タ〕ヒ犯シタル罪ノ贖^{あがなう}ベキ由ナキ事ヲ信セリ」。つまり「仮令^{たとひ}一度、罪ヲ天ニ得ルトモ、祈ル処アリ」とするのが、イエスであるのに対し、「孔子ノ道デハ、祈ル処ナクト云」と論評する。

こうしたパーク批判の背景には、いわゆる「アンドーヴァー神学論争」が潜在する。神を知らずに死去した人間が、死後に救われるかどうか（future probation）をめぐるこの論争は、神学校教授・理事やミッション（アメリカン・ボード）の幹部をも巻き込んだ。その際、新島はパークと立場を異にする。

この論争中、伝統的な「ニューイングランド神学」の最後の旗手、パークの神学は、リベラルな「新神学」に傾斜した若手教授たちから、痛烈な批判を受けた。保守派の巨頭、パークは、優れた門弟たちが、次々と自分から離れて行くのを空しく眺めざるをえなかった。とりわけ E・C・スマイス（教会史）は、新神学のチャンピオンとして、パークと真正面から対立した。それが表面化するのが、パークの後任人事である。

神学校のほとんどの教授や理事たちは、パークの後任に N・スマイスを選出した。が、3人の客員で構成される委員会（理事会のお目付け役）は、2対1で拒否した。この委員会が理事会と異なる決定を下したのは、開校以来初の異例事であった。

就任を拒否された N・スマイスは、神学校教授、E・C・スマイスの弟である。兄は出身大学こそ、ポウドイン（父親の母校）であるが、フィリップ

スとアンドーヴァー神学校卒なので、新島の先輩にあたる。弟はドイツで批判的神学の感化を受けて帰国し、兄と同様に、パークが代表する保守派神学に異を唱えた。

リベラル派の新神学は、保守派やミッションには、海外伝道の動機や意義を抹殺する危険神学であった。パーク自身も、スマイス（弟）の教授任命にももちろん反対した。植村正久は、新島を「パークの弟子」としながらも、「新島は後年、パークを批判し、スマイス・スミス^{けいよう}を掲揚した」と論評する。が、「スマイス・スミス」なる教授はいない。スマイス兄弟のどちらかであろう。

新島襄の受洗

ところで、新島は、高校生の時にすでにパークの指導を受けていたと思われる。新島が、神学校教会で受洗したのは、1866年12月30日、高校入学後、一年少し経った頃である。洗礼記録が現存しないため、いまもって授洗者（牧師）は特定できない。

内村鑑三ひとり、シーリーこそ「実ニ新島氏ニ洗礼ヲ授ケシ仁ナレバ」と断定する。が、その根拠は不確実である。

神学校教会は、「学園教会^{カレッジ・チャーチ}」であった。特定の専任牧師を置かず、高校と同じキャンパスにあった神学校の教授が、持ち廻りで説教や授洗をするのが、慣行^{ならわし}であった。だから、アーモスト大学教授のシーリーが、特別の礼拝でもない年末に、アーモストからわざわざ神学校にまで出向いて、授洗をするのは、かなり不自然なことである。

シーリーは学長に就任するや、アーモスト大学学園教会の牧師（1877年～92年）をも兼任する。また、アンドーヴァー神学校でも、1873年から一年間だけ講義を受け持った。しかし、そのいずれも、新島が高校を卒業してからのことなので、シーリーが新島に授洗した可能性は低い。

逆に、シーリーがアーモスト大学の学園教会牧師を務めた時期は、内村のアーモスト在学中なので、内村に間違っただ臆断が生まれたのであろう。

当時、フィリップスの生徒たちは、毎日曜日には聖書研究（神学生が担

当)と神学校教会礼拝の双方に出席する義務があった。新島も、平日には「学校で」英教を、「毎週、日曜日には聖書を」学ぶ、と手紙に記すので、聖書研究もキャンパス(学校か神学校教会)でなされたと思われる。

それだけに、同一日曜日に新島が地域のオールド・サウス教会に通うことには、無理が伴う。神学校教会で洗礼を受けただけに、新島は高校生でありながら、神学生や神学校の教授(牧師)の説教を聞いたり、宗教的な指導を受けたりする機会に、恵まれたはずである。中でも、パークの感化は、群を抜いていたのではないか。

「聖学校の教師」

パークは神学者としての力量以上に、説教者としての才能に恵まれていた。講壇から聖書の言葉を語る姿は、実に威厳と権威に満ちていたので、会衆が息を潜めて謹聴する有様は、「ハエが飛ぶ羽の音が、まるで大砲のように響き渡るほど」であったという。

おそらく、新島も何度かそうした迫真の場を体験したであろう。留学生活を始めてからかなり早い段階で、パークその人とも知り合ったはずである。いや、パークが先に新島に目をかけたかもしれない。留守家族への手紙で、新島はこう認める。

「人々小子を愛敬し、大学校〔フィリップス〕の頭取〔テイラー校長〕、聖学校〔神学校〕の教師に至る迄も、小子を深切〔親切〕に取扱、路上に出逢候ハ、手を握り(此国の礼なり)、今日は如何御座ある哉、と丁寧に挨拶いたし候儀」。

「聖学校の教師」とは、パークであろう。彼はテイラー校長と共にキャンパスに住む。しかも、隣り同士である(実は、パークの希望で、死後もそうである。両人の墓は、校内のキャンパス墓地に並んで立つ)。パークには、「親友」がふたりいたが、その一人が校長であった。新島も列席した校長の葬儀では、聖書朗読をJ・L・テイラーが、式辞をパークが受け持った。校長の墓の銘文も、パークが選んだ。

まもなく編まれた校長の追悼集(新島旧邸文庫)には、パーク、J・L・テ

イラー、ほかひとりが、追悼文を寄せた。こうした好^{よしみ}からも、隣り同士の校長とパークは、新島を早くから自宅に招いてくれていたはずである。

新島とパークの交流が、早くから始まっていたことを示すエピソードがある。高校の夏休み（1867年7月）、新島はA・ハーディやH・S・テイラー船長（ワイルド・ローヴァー号）の出身地に行こうとしたが、汽車の乗り換えに失敗、別の所に着いてしまった。困り果てた新島は、最寄^{もより}の教会を訪ね、牧師に宿の斡旋を依頼した。

当初、新島は牧師から胡散臭^{うさんくさ}い眼で見られ、スペインの貧乏漁師と間違われた。牧師は新島を安宿へ案内しようとした。しかし、新島がアンドーヴァーから来たことを告げると、牧師は同地のオールド・サウス教会の役員とパークの名前を告げた。「共によく存じている」と新島が答えると、にわかには牧師は態度を改め、新島の来歴と素性を詳しく聞こうとした。新島への信頼度を急上昇させた牧師は、その地で最高級のホテルに新島を連れて行き、料金も支払ってくれた。

明らかに「パーク効果」である。パークが、それよりほんの2、3週間前に、按手礼（牧師任職式）のためにこの地を訪ねていたことも、新島には幸いした。

E・A・パークのサイン

実はそれ以上に信じ難いことが、起きている。新島が当時、所持していたサイン帳には、パークのサインがある。日付は彼が想定外の街に迷い込んだ、まさにその日である。すなわち、アンドーヴァーを発つその日に新島はパークを訪ねて、サインを所望したのであろうか。であれば、先の牧師に対する、「今朝もお会いしましたよ」との最新情報が、新島の信用を高めるのに有力な材料となったはずである。ちなみに、パークのサインには、次の一文が添えられている。

Thanking you for your beautiful gift. I am, Dear Sir, very affectionately, your friend.

プレゼントのやり取りまでしているところを見ると、新島は大学院教授

(牧師) とすでに懇意な関係を築いていることが、分かる。しかも、神学校教授のサインは、パークだけである。これは、パークが新島に洗礼を受けた有力な典拠のひとつとなりえる。

パークの授業

パークとの関係は、新島のアーモスト時代にはやや疎遠となる。新島が大学院入学のためにアンドーヴァーに戻るや、親交が復活する。神学校に入学した半年後（1871年2月）、大学時代の室友への返信に新島は、こう記す。

「勉学を続けるためにアンドーヴァーに戻られる、と聞いて大変うれしいです。以前に一度、神学を勉強したにもかかわらず、パーク先生の講義を受講されるとのことでありますが、けっして後悔はされないはずです」。

パークの授業は、評判だったらしい。新島がパークの授業をとったのは、同年秋学期のことで、その様子をハーディ夫人に書き送っている。「私はパーク教授の講義に出席し、その講義に沿った書物を読んでいます。今年は神学校でいちばん厳しい年であるかもしれません」。

パークの授業は、ウイットに富んでいた。ソクラテスの手法を駆使して、質問を次々と学生に投げかけた。それだけに、新島には相当の予習が要求される厳しい科目であった。

同志社には、新島自筆の「神学受講ノート」が複数冊、残されている。パークの受講ノートも何冊か含まれる。新島がパークから学んだことのひとつが、「自由」と「良心」で、いずれも、新島のキーワードとなった。自由とは、「良心に束縛された自由」であり、隣人に仕えることを要求する、という捉え方を学んだ。

パーク譲りの神学

帰国直後、新島は横浜で、日英両語での礼拝説教を複数回、依頼された。日本語の説教は、評判がよくなかった。言葉の障壁以外にも、神学の古さが要因であった。植村はこう指摘する。

「此れ〔不評の要因〕は、アンドヴァルの神学校で、エドウォルド・パーク教授の神学に育てられた結果、其ままとしては、余り不思議では無かつたらう。当時、新島の神学は、余程、保守的であつたに相違ない」。

パークへの敬慕から、新島は神学校の最終学年（3年目）では、パークの授業を履修することを最優先させた。が、貫徹できなかった。岩倉使節団との雇用契約が完了した際は、ドイツからそのまま日本へ帰国するという選択肢もあった。しかし、新島は神学校に復学した。パークの授業を修めるためである。「私は神学校の二年度〔一八七二年〕のときに、ヨーロッパに行ったために十五か月休んでしまい、パーク教授の科目を修得する機会を失いました」。

一方のパークもまたハーディと共に、神学校への復学を早くから新島に進言している。新島が田中不二麿ふじまろに同行して、ニューヨークから渡英する1か月前（1872年4月）、パークは新島宛てに、スコットランドの関係者への紹介状を送付し、「無事に神学校に復学すること」とわざわざ書き添えている。

パークに再会

2度目の渡米時（1884年）、10月31日に新島はアンドヴァーにヒデュン家を訪ね、旧交を温めた。同日、さっそくパーク（元教授）やシーリーなど、2、3の旧師にも挨拶をしている。「別シテパーク先生之御宅」である。2日には、パーク家で昼食を、そしてE・C・スマイス教授宅で夕食を振舞われた。3日、今度はJ・L・テイラー教授、ならびにE・テイラーを訪問している。

翌年9月21日にも新島は、神学校学長のF・P・バンククロフトからアンドヴァーに招かれた。翌日、スマイス教授から請われて、礼拝で話をした。24日には、パークに会い、馬車に同乗させてもらっている。

28日、今度はスマイス教授の馬車に同乗。30日には、パークからお茶に招かれ、その後、数マイル、ともにドライブしている。10月に入ってから、1日にスマイス教授から呼ばれた。夕方のお茶会には、G・ハリス教授（パークの後任者）も加わった。

以上の消息からも、パークと新島との親密さが、際立つ。パークから洗礼を受けたことが、底流にあったからであろうか。

今もボストンの旧アメリカン・ボード本部ビルには、ミッションの功労者2人の胸像が飾られている。ハーディとパークである。前者は、新島の最大の恩人でもある「アメリカの父」。一方のパークも新島には「魂の父」で、シーリーと並ぶ偉大な恩師であった。新島は善きメンターに恵まれたものである。